

映画「時の行路」 全県上映にご支援を



高知県「時の行路」
上映委員会 事務局長
胡塵崎ゆう子



高退協のみならず、4月10日の時の行路上映にご協力ありがとうございました。おかげで410名の方に観ていただき無事スタートできました。が、本来ならこの高知市の上映を成功させて、県下各地で上映を始める予定でしたが、コロナ禍でも上映は可能なのですが、準備のための会合が出来ないのです。昨年完成披露試写会を成功させ全県下で上映を計画した矢先にコロナで2度延期、やっと今年4月に上映スタートが切れたと思ったところ、また出直しを余儀なくされてしまいました。上映委員会では今後、安芸、本山、佐川、窪川、四万十等で上映し、最終上映として一度高知市で上映し締めくくろうと思っております。高退協の仲間みならず、またお力をお貸しいただきました。ありがとうございます。

この映画の上映になぜこれほど力を入れるのか、それはこの映画が単に良い映画だからというのではなく、昨年年度の「復興映画賞」受賞で証明されたのですが、この映画は私たち高知のメンバーが先頭に

のメンバーが一番に応えたのです。丁度その頃朝日新聞の相談コーナー「幸福のつば」という欄に30代の女性の投稿がありました。その女性は派遣労働で職場を転々として、お父さんからダメ出しを受けていたのです。田嶋の世代で出ていけば何とかなる、それが出来ぬのはおまえの弱さだ、というのです。その女性は、自分はダメ人間だ、この人たちに「あなたは悪くない」ということを伝えたい、共同映画社に手紙で映画化を訴えました。あとで高知に來られた共同映画社の社長さんから、その手紙を中心とした映画化にふきつたと言われ、嬉しい気持ちとこれは大事と責任の重さに身の引き締まる思いがしました。映画化には1億とか2億かかる、と聞いては驚くほどの話でしたが、高知は速くも全国の1%が指標だから、当面100万円、200万円を目標にすればと考えて仲間を募りました。当時の呼びかけ人の一人に國松勝先生がいて、時の行路映画化推進会議を立ち上げ、全国に広げていったので、映画化の運動は2012年から始まりましたが、紆余曲折あり、実際に1万円、10万円の製作協力を出してもら

うサポーターを募る等具体的な進みだしたのは2016年からです。サポーターを募りながら、資金作りに「ザ・思い出」と「サクラ花」の映画上映もしました。映画化は神山監督が引き受けてくれてから急ピッチで進みました。高知は88人の方の出資者も得て当初の目標金額を確保し、映画の完成を待ちました。こうして、8年がかりで実現した映画の完成は本当に嬉しかったです。いまコロナ禍では、非正規の労働者をはじめとする雇止めや、大学生もアルバイトができない状況も出ています。また、自殺者の急増等、リマジンショックの時以上に深刻な政治的貧困が広がっています。こんな状態がまかり通る日本のおかしさに、気づくことが大事だと思っております。私たち一人ひとりの力は弱くても力を合わせていくことで、巨大な敵に立ち向かえるのだという、この映画は訴えています。労働組合がなくてよい組織力がなくなっている中で、この上映運動を通して回復の力になればとも思っています。

判別した。知らなかったのだから、どうができてよかった。こういふことが当たり前になつていくのは嫌です。ね(20代)。「組合活動をしていける者として家族の大切さを仲間の大切さを改めて考えさせられました。五味さんの無念さは心に突き刺さるものがありません(30代)。「小さいなりに、自分なりに頑張れば、大きなゾウも倒せる」とのセリフが印象的でした。みんな手を取り合って世の中を変えていきたいと思います。(40代)。「厳しい現実と希望との両方を感じています。不断の闘いが必要だと思います。音楽、俳優さんとも素晴らしいです(50代)。「未だにこのようないろんな裁判がなされていることに憤りを感じました(60代)。「資本主義の類廃期にあつて、人権よりカネに企業利益の方に意識が傾く勢力の大きさに圧迫されます。巨大な象に立ち向かう一匹の蟻でありたいと思えます(70代以上)」。このようなものではないかと、この映画の上映はとても意義のあることだということです。事務局では確認しています。コロナ感染状況をにらみながら、全県で成功させたいと思っております。高退協のみならず、引き続きのご支援をよろしくお願いたします。

高退協文集

川柳

帆傘抄

小澤 幸泉

卒業の門をいくつも通り過ぎ、
神さまに今日も生かすよと起こされ、
ぽんやりと友の遺影に呼びかける
生き抜いてコロナ悪政止めさせよ。
「やんかやんか」の風

短歌

老いの誓

叶岡淑子

ワクチンの予約に難儀、パソコンも電話も暮らしの利器ではない、
半日に三科の受診とまちと老身のよま自覚する日々
輪番の町内会の当番を果たさぬ思い、老いの誓い
クレーター
田上悦子



俳句

花蘇鉄の四季

小澤 幸泉

六月の雨は土佐路を叩きつけ
故郷が時々見える梅雨晴れ間
ペンテコステ御堂を覆う鐘の音
紫陽花の味それぞれに蜜深い
幼妹の夏を待たずに独り遊ぐ
(蘇鉄逝去五十年)

日々の暮し

山本晶子

好きな家事トイレ掃除と、俳優谷原幸介とでもマンサム
日々家族の「ほんをつくる六児の父谷原幸介これが普通と
日々の暮し大切にすれば戦争は二度と起きない、花森氏言う
(「暮しの手帖」の創刊号)

第182回高退協読書会案内

8月11日(水) 14時～ 4ト一在2F (206号室)
課題本 安田節子著 食べ物通信社 『食べ物劣化する日本』 (右の写真参照)
参加費 六百元(会場使用料)
参加希望者は直接お越しください。お問い合わせは次の方々のいずれかにご連絡ください。
樋口勇雄 高橋泰宏 小島真子 大川法由記 井上圭介 三谷隆彦



6月例会の報告

齋藤幸平 『人新世の資本論』
6月の例会は初めての山本晶子さんの参加を得、青木、井上、大川、小島、叶岡、高橋、谷内、三谷、樋口の10名が集まりました。推薦者からは要旨を文章化して報告がありました。「人新世は資本主義が生み出した人工物・・・資本新世・・・人びとが力を合わせて連携し、資本の専制から、この地球・・・を守ることでできたなら・・・人新世と呼べる。・・・その未来は、本書を読んだあなたが3.5%のひとりとして加わる決断をするかどうかにかかっている。」(「おわりに」、より)という若き研究者の主張に賛意が寄せられました。